

「真風 燒跡でラジオを聞く四谷某町會の隣組」 神前でラジオを聴く大井校の疎開児童



小さき胸も一杯 只深い沈黙の疎開児童

多摩川の清流にかこまれた静かな松林、都下七生村に疎開している大井第一国民学校女子四年生、六年生の疎開児童はいつものように十五日の午前十一時三十分まで蟬の声を聞きながら静かに書き方を勉強していた。やがて先生に率いられた防空服装に身を整え襟を正した児童達は平山寮の前庭にある、天照大神を祀る平山神社の拝殿に参列、磨き上げられた板の間にきちんと正座してかねて予告されていた天皇陛下の御放送の時を御待ち申し上げた。

君が代の調べが静かに響きわたり、やがて玉音が耳に入ると子供達は一同頭を深く垂れてまるで石のように動かなくなつた。御放送の御終了を告げる放送員の声がしても誰一人動く者はなかった、上級生の列からは小さなすすり泣きの声がもれていた。

やがて静かに先生に引率されて平山寮に帰るとお昼の支度が出来上がっていて各自の机の上には真赤なトマトと青いきゅうりが皿に光っていた。何時ものように合掌して「いただきます」を斉唱したが深い感激に小さい胸がつまったのか箸をとる者なく先生からいはれ初めて我に返つたように児童達は食事をとり始めたが、いつもは賑やかな食卓なのに今日はまるで茶碗の音一つしない静かさ、子供達の口も動かない、今日の御詔書が幼い者達にどんな深い感銘を与えたか―憤り、悲しみ小さい胸はこれらのものでいっぱいになっているだろう。彼らの石のような沈黙がそれをはっきり物語っていた。

一億断腸 慚愧に震ふ

玉砂利に伏し鳴咽

たゞ涙で拜す宮城
緑の梢も悲痛こもる

「玉砂利に伏し鳴咽」とは、昭和二十年八月十五日、東京市神田区、大井第一国民学校女子四年生、六年生の疎開児童が、平山寮の前庭にある、天照大神を祀る平山神社の拝殿に参列し、磨き上げられた板の間にきちんと正座して、かねて予告されていた天皇陛下の御放送の時を御待ち申し上げた。児童達は、君が代の調べが静かに響きわたり、やがて玉音が耳に入ると、一同頭を深く垂れて、まるで石のように動かなくなつた。御放送の御終了を告げる放送員の声がしても、誰一人動く者はなかった。上級生の列からは、小さなすすり泣きの声がもれていた。

假令苦難の道も

焦土の中咽ぶ焼跡隣組

小さき胸も一杯

